

2025年7月20日 礼拝説教要旨  
 ヨハネによる福音書講解説教45「命の光」  
 詩編27：1～3、ヨハネ8：12～20

今日与えられました第8章12節以下は、第7章からの続きと読むことができます。第7章にありました仮庵祭を思い起こしてください。この祭りは、イスラエルの民がエジプトを脱出してから仮庵いわゆるテントでの放浪生活をするのですが、そのことに由来する祭りです。仮小屋のようなものを作つてその中で一週間過ごしながら40年の厳しい荒野の生活を神さまが守り導いてくださったことを思い起こすのです。現在でもユダヤ人はこの祭りを忠実に行います。

この仮庵祭のことで多くの学者が、祭りの初日から最終日まで、神殿の境内にあります「婦人の庭」という場所に四本の燭台が設置されていて、そこに火を灯したということに言及しています。「イエスは神殿の境内で教えておられたとき、宝物殿の近くでこれらのことと話をされた」（20節）とあります。どうもこの宝物殿のところに四本の燭台があった。それが夜になると明々と燃えて、辺りを照らし、また遠くからもその灯りがよく見えたと伝えられます。出エジプト記では、神さまがイスラエルの民を昼は雲の柱、夜は火の柱で導いたという話があります（13：17～）。人々はこの燭台の火を見て、その雲の柱、火の柱を思い起こしたのかもしれません。辛いこと、悲しいことがあっても、その光を見て勇気が湧いて来たかもしれません。そこでイエスさまは言われたのです。「わたしは世の光である」（12節）と。

天地創造の光を思い起します。「神は言われた。『光あれ』こうして、光があつた」（創世記1：3）火を見つめながら、天地創造の光を思う。その光からすべてが始まりました。それまでは何もなかった。「地は混沌であつて、闇が深淵の面にあり」（創世記1：2）と聖書にあります。考えてみますと、今の世の中もまさに混沌、闇のような状態ではないでしょうか。争いが絶えず、先行きが見えない現実があります。でも神さまはそこに光を与え、秩序を与えます。

改めて、世の中の闇、混沌の原因を考えます時に、今日のイエスさまの言葉が心に響いてまいります。「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない」（14節）ここに「どこから来てどこへ行くのか知らない」とあります。皆さんは自分がどこから来て、どこへ行くのか知っているでしょうか。出身を聞いているのではありません。もっと根源的なことです。人間の始まり、そして目的です。人間とは何者なのか。どこから来てどこへ行こうとしているのか。先日、NHKの番組を観ておりましたら「ミッドライフクライシス」（中高年の危機）ということを取り上げておりました。これは一種の目的喪失、アイデンティティクライシスのことです。10代の思春期にもそういう時期がありますが、50代60代でもそういう時期が来る。定年が見えて来て、ふと自分は何のために働いて来たのか。人生の目的が見えなくなる。子育てが終わって、介護が終わって生きる目的がわからなくなる。そういう不安を抱える人が多いと言います。

聖書では、この目的を見失った状態を罪と呼びます。せっかく神さまが「光あれ」と闇の状態から救い出して命を与えてくださったにもかかわらず、神さまを捨て、神さまから離れて生きて行こうとする。それがあのアダムとエバの物語、神さまとの約束を破り、楽園を追放される姿に象徴的に表されています。そこにわたしたちの目的喪失、クライシスの根本的な原因があ

ります。けれども、神さまはわたしたちにイエスさまをくださいました。イエスさまは「わたしは世の光である」とおっしゃった。罪を犯し、闇と混沌の罪にあるわたしたちに光を灯して、もう一度、生きる目的を示してください。イスラエルの民が、昼は雲の柱、夜は火の柱によって導かれていたように、イエスさまが光となって、わたしたちを目的に向かって導かれるのです。それは終末の完成、永遠の神さまの国です。

パウロは、ローマの信徒への手紙の中で「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです」（11：36）と述べています。また聖書の最後、ヨハネの黙示録には「わたしはアルファでありオメガである。最初の者にして最後の者、初めであり終わりである」（22：13）とあります。そのように初めがあり終わりがある。明確な方向性がある。神さまに造られた、天地創造の始まりから、そして最終的な目的地、終末の完成を聖書は示しています。その完成を目指して、わたしたちはこの世を旅している。どこから来てどこへ行こうとしているのか。それははっきりしているのです。しかも、その完成に向かって、わたしたちの人生を導いてくださるお方イエスさまがおられます。

ちなみに「わたしは世の光である」ここには「わたしは～である」（エゴー・エイミ）という言葉が使われます。これは第6章のところでも出て来ました。「わたしは命のパンである」（6：48）またこの後でも「わたしは道であり、真理であり、命である」（14：6）と言われます。ここにヨハネ福音書最大の特徴がありますが、それは何よりもイエスさまがわたしたちの人生をその目的、完成に向かって導く存在であることを示しています。イエスさまがわたしたちの人生の旅路を目的地に向かって導く光となってくださり、道となってくださる。またこの旅路を続けるために欠かせない命の糧、パンとなってくださる。のためにイエスさまはご自身の命を十字架でささげてくださいました。ご自身を光として、道として、パンとしてわたしたちに与え尽くしてくださった。だからこそ、わたしたちは迷わずに、人生の旅路を、完成を目指して進み続けることができるのです。

「わたしは世の光である」（8：12）ここを読む時に、マタイによる福音書の山上の説教でイエスさまが「あなたがたは世の光である・・・あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」（5：14～16）と言われたことを思い起こします。洗礼を受けて世の光であるイエスさまに結ばれたわたしたちは、自らも世の光として、光の子として生きることができるという約束です。世の中を見れば、先の見えないことばかりで不安だらけ、混沌とした闇の時代を生きていますけれども、わたしたち一人一人が大小さまざまな光としてこの世に存在していることを忘れてはいけません。毎週、この礼拝に集まるごとに、それぞれ問題を抱えていても、でもふつと心にともし火が灯ることがないでしょうか。信仰の友に励まされ温かい気持ちになったり、勇気が湧いてくる。それはとても幸せなことです。

天の父よ。わたしは世の光であるとおっしゃった、イエスさまの光の中に立たせてください。わたしたちの人生がどこから来て、どこへ向かうのか、見失うことがないようにしてください。そして自らも光の子として歩むことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。